

特集 「Welcome to the World of Color Science: 色彩学の体験授業・導入教育事例」
 Special Issue: Welcome to the World of Color Science: Publishing and archiving of trial lectures on color science

住民主体の体制による景観まちづくりワークショップの成果と問題

Achievements and problems demonstrated by citizen-lead landscape development

牧野 晓世

Akiyo Makino

村上 加奈子

Kanako Murakami

東海学園大学

Tokai Gakuen University

鹿児島大学

Kagoshima University

キーワード：住民主体、景観まちづくり、ワークショップ

Keywords : citizen-lead, landscape development, workshop

1. 研究の背景と目的

わが国では、良好な景観の形成を促進するため、生活環境の創造及び個性的で活力ある地域社会の実現等を図ることを目的とした景観法が2004年に制定された。2016年には明日の日本を支える観光ビジョン¹⁾が策定され、地域の魅力を高めるために2020年までに全都道府県・全国の半数の市区町村で景観計画を策定する目標が掲げられた。このように、景観形成とまちづくりは密接に関係し、景観まちづくり⁽¹⁾は国、地方公共団体、事業者、住民の連携が不可欠となっている。しかし、実際は住民・事業者の具体的な取組や地方公共団体と住民・事業者の景観計画の策定や運用における合意形成や協働に関する問題が指摘されている（国土交通省、2019）²⁾。

一方、まちづくりの主体⁽²⁾による色彩を通じた景観まちづくりの成果も示されている。前述の明日の日本を支える観光ビジョンの目標を達成するために公表された資料³⁾には、個性化を図るため、地域の色彩設定が推奨されている。また、景観計画における地域資源に由来する色彩基準等の運用により、住民等が景観まちづくりに関与することを示した研究⁴⁾もある。しかし、住民主体の体制⁽³⁾による、地域資源に由来する色彩を通じた景観まちづくりの知見は十分蓄積されているとは言えない。これを明らかにすることは、景観計画の見直しや新規策定を検討している景観行政団体に有益な知見になると考えられる。そこで、本研究の目的を、住民主体の体制による、地域資源に由来する色彩を通じた景観まちづくりの成果と問題を明らかにすることとし、本稿では住民を支援する大学人としての立場から、本研究検討開始からワークショップ実施までの成果と問題について報告する。

2. 方法

対象地は、鹿児島県鹿児島市に位置する宇宿商店街

とした。実施体制は、組合員33名から構成される宇宿商店街振興組合（以下、「組合」）を中心とし、小学生等の住民を含めることとした。景観まちづくりを支援する専門家として、東海学園大学及び鹿児島大学南九州・南西諸島域イノベーションセンター（以下、「大学」）が協働した。研究内容は、上記体制による地域資源に由来する色彩の開発とした。研究方法は、牧野・木方（2021）⁵⁾を参考にし、ワークショップ、色彩の活用に関するインタビュー、当該商店街に関する印象語調査、住民投票、色彩概要設定とした。研究期間は2023年2月～2024年10月とした。

3. 宇宿商店街の概要

宇宿商店街は、JR宇宿駅及び市電脇田電停を中心とし、宇宿1丁目・3丁目・4丁目・宇宿町にまたがる地区で、宇宿本通りと旧国道に面した区域を指す。総延長は550mで近隣商圏人口は約2万2千人（2010年時点）⁶⁾である。

当該商店街は、古くから鹿児島市街地と郊外との接続機能を果たしてきた⁶⁾。昨今は鹿児島市内における都市機能の外延化と重心の南西部への移行に伴い、宇宿方面への人口流入や20代～40代の若・中年層の定着が進み、商圈基盤が拡充されつつある。また、来街誘因である大学病院への通過地点であることや伝統的な祭事等の継承等の好材料もある。半面、今日まで周辺大型店の増床出店に対して、有効な手立てを持たなかつたため、購買力の流出が喫緊の課題となっている。このような環境変化に対応し、魅力ある街を創造するため、1992年に組合が設立され、活性化計画が策定された。1993年にはシンボルマーク（えびす様）及びシンボルカラー（ウルトラマリン）等の当該商店街のアイデンティティが設定され、催事等で着用する法被のデザインに活用されている。

2009年から商店街単独では鹿児島市初となる情報誌が発行され、「鹿児島で住みたい街No.1になる」と

いう将来像が掲げられた⁷⁾。以来、一層の情報発信・ブランド化の向上が図られてきた。その結果、国内外の顧客が集まる商店街として知られるようになった⁸⁾。また、組合において月に一度の理事会の開催、理事会議事録や理事会便り等の情報共有の仕組みが構築されている。さらに組合内の世代交代対策として、若手及び女性理事の育成が進められている⁵⁾。これら一連の取組が評価され、当該商店街は2024年に魅力ある商店街として全国規模の表彰事業で受賞した⁹⁾。しかし、住民の当該商店街の将来像やアイデンティティの認識の程度については不明である⁶⁾。

4. 本研究検討開始からワークショップ実施までの過程

はじめに、従前から当該商店街の取組を把握していた鹿児島大学特任専門員が仲介し、宇宿商店街振興組合理事長（以下、「理事長」）と大学が対面で牧野・木方（2021）⁵⁾の実践事例を共有し、地域資源に由来する色彩を通じた景観まちづくりについての意見交換を行った（2023年2月20日）。その後、再び意見交換を行い、本研究実施に向けて理事長の内諾を得るに至った（同年7月7日）。しかし、本研究の実施には10名の理事で構成される宇宿商店街振興組合理事会（以下、「理事会」）の合意が必要であった。そこで、理事会において大学がオンラインで前述の実践事例をもとに、本研究に係る話題提供をした。その後、色彩と景観まちづくりとの関係性についての質疑応答を行ったが、本研究についての反対意見はなかった。その後、理事長の進行で本研究の実施が承認された（同年9月21日）。次に、大学が理事会においてオンラインで本研究実施に関する問題提起をした。この段階で、景観やまちづくりに詳しい2名の担当者（副理事長及び組合青年部会員を兼ねる若手の理事代理）が選出され、具体的な検討が可能となった（同年12月22日）。その後、オンラインで理事長及び担当者と理事会開催前に打ち合わせをし、前述の問題に関する回答の方向性を確認した（2024年2月29日）。続いて、大学が理事会においてオンラインで前述の問題に関する意見を求め、理事長を中心に回答がなされた（同年月日）。これを踏まえ、理事長、担当者ら、大学が理事会とは別の会合で、対面及びオンラインで研究計画を精査した。この時、若手の担当者から様々な景観まちづくりに関する色彩の活用法が提案された（同年3月7日）。さらに、理事長、担当者ら、大学が理事会とは別の会合で、対面でワークショップの詳細を確認した（同年3月28日）。その際、若手の担当者の発案によりワークショップは『うすきのカラートレジャーハント』、実施体制は『うすきのカラートレ

ジャーハントチーム』と命名された。この日に大学はワークショップに先駆けて当該商店街の測色調査を実施した。続いて、色彩に関するワークショップ参加者として適切と考えられる小学生高学年¹⁰⁾に参加を促すため、理事長と大学が地区内の宇宿小学校を訪問し、趣旨説明を行った（同年4月24日）。その結果、校長らの同意が得られたため、チラシの配布が可能となった。また、理事長、担当者ら、大学が理事会とは別の会合で、対面及びオンラインでワークショップ当日までの作業確認をした（同年4月11日）。

このように、本研究において意見交換からワークショップ実施まで計10回の意見交換等と約1年の期間を要したが、組合と大学との協働体制が構築されたことから、2024年5月31日付で共同研究契約を締結することとし、ワークショップ実施に至った。

5. ワークショップ

5.1. 方法

ワークショップは、色彩をテーマとして当該商店街にある地域らしさを探し、その良さを発見するとともに、地域らしさを象徴する色彩を見つけることを目的として実施した。実施日時は、2024年5月19日（日）10:00～12:30⁷⁾で、天気は曇りであった。実施場所は、室内会場及び当該商店街周辺を2つに分割した調査エリアA及びBとした。参加者は、小学生及び中学生4名（男性3名、女性1名、平均年齢10.75歳、SD=1.30）と、理事長、担当者ら、保護者を含む計12名であった。調査道具は、2021年L版塗料用標準色ポケット版と、古賀ら（1999）¹¹⁾に基づき、色彩値の記載欄や調査エリアごとに必須調査項目を付した半構造化ワークシートであった。合わせて、調査の補助を目的とした当該商店街情報誌、腕章、収納用バッグを使用した。また、小林（1997）¹²⁾を参考に当該商店街に関する印象語調査用紙を用意した。

当日は、参加者全員が会場に集合したことを確認した後、はじめに理事長及び校長が挨拶し、大学関係者が自己紹介した。その後、大学関係者が講師となり、ワークショップを進行した。導入として小学生及び中学生に宇宿商店街らしいものを聞いたところ、普段よく利用すると思われる「コンビニエンスストア」、「ラーメン店」等の回答を得た。続いて、講師が調査方法を説明し、参加者全員が測色の練習をした。次に、調査エリアA及びBに基づき、2つのグループに分けた上で小学生及び中学生と付き添い者がルールやルートを確認した。その後、各々が調査エリアに向かい、調査道具を用いて調査を行った。調査時間は60分であった。その際、小学生及び中学生1名に

つき1名～2名の付き添い者として理事長、担当者ら、大学関係者、保護者が調査支援や安全確保をした(図1、2)。調査後、室内に戻り、調査による気づきを小学生及び中学生が発表した。その後、印象語調査を試行した。最後に記念撮影をし、ワークショップを終了した。



図1 調査エリアAの様子 図2 調査エリアBの様子

5.2. 結果

5.2.1. ワークシートによる調査結果

調査に参加した小学生及び中学生(調査者1～4)の記入済みワークシートに基づき、調査結果を示す(表1、2)。

表1 調査エリアAにおける測色結果

調査対象 (●は必須調査項目)	マンセル値による測色値	
	調査者1	調査者2
●脇田電停待合室(椅子)	2.5PB5/8	—
●脇田電停待合室(電光掲示板の枠)	—	10YR3/2
●ケヤキ(幹)	2.5Y6/2	—
●ケヤキ(葉)	—	10Y6/4
●クス(幹)	10R6/6	—
●クス(葉)	—	2.5GY8/8
●脇田公園の田の神	7.5GY8/2	5R5/3
●脇田公園の桜島噴火記念碑	7.5R4/8	5R5/2
宇宿4丁目の田の神	10Y6/4	5R4/2

表2 調査エリアBにおける測色結果

調査対象 (●は必須調査項目)	マンセル値による測色値	
	調査者3	調査者4
●宇宿商店街の街灯	5PB6/8	5PB4/10
●神明神社の鳥居	8.75R5/12	8.75R5/12
●脇田川	10YR7/6	10YR5/4
郵便局の外壁	2.5G7/2	2.5G5/6
地元銀行の車止め	1.25Y7.5/14	—
脇田中央公園の滑り台	—	2.5PB4/10

調査エリアAは調査者1及び2が担当した。両者は中学校1年生で、必須調査項目の要素について互いに相談し、分担して測色した。そのため、ワークシートには同一の必須調査項目において複数の色彩値が記された。また、理事長の助言を得て、必須調査項目とは別の物(田の神)が測色された。また、ワークシートに「ケヤキの葉はケヤキを象徴するもの」、「いろんな季節を感じさせてくれる」、「クスは宇宿のシンボル」等の記述があった。

調査エリアBは調査者3及び4が担当した。調査者

3は小学校5年生、調査者4は小学校3年生で、付き添い者の支援で測色とワークシートへの記入を行った。最初は測色やその箇所について、質問しながら作業を行っていたが、慣れるにつれて自発的に行えるようになった。神社では神主による説明を聞き、もっとも古い鳥居を測色する等の工夫も見られた。ワークシートには、「郵便局の外壁のタイルの色がめずらしい」等の記述があった。

調査中、事前の説明時に発言された「コンビニエンスストア」や「ラーメン店」等には調査者の興味が示されず、いずれのワークシートにも測色値が記入されなかった。また、当該商店街のシンボルマーク及びシンボルカラーは観察されず、記入されなかった。なお、講師による事前の測色調査結果と、調査者1～4が記入した測色調査結果において異なる値が複数確認された。

5.2.2. 印象語調査結果

小林(1997)¹²⁾に基づき、当該商店街に関する印象語調査を調査に参加した小学生及び中学生4名に試行した。その際、漢字を用いず、ひらがなまたはカタカナによる15の形容詞⁽⁸⁾を用い、将来に残したいと思う「宇宿商店街らしさ」を表現した言葉を3つ選択するよう求めた。その結果、小学生からは語句の意味がわからないことを理由に未回答の用紙が提出された。また、中学生からは回答済の用紙が提出されたものの、語句の意味が一部わからないといった感想が寄せられた。

5.2.3. 調査後の発言

調査終了後の小学生及び中学生の発言から、「意外と楽しかった」、「普段歩いている場所だったが、今回のワークショップを通じて意外なところに田の神があることを初めて知った」、「宇宿商店街らしい色は多くはないことがわかった」等の意見が得られた。加えて、「ワークショップの内容がチラシではわかりづらかった」、「お菓子があることをチラシに掲載した方がよかったです」、「謎解きゲーム形式だともっと面白そうになると思う」等、ワークショップの内容や広報に関する意見も出された。

5.3. 考察

以上から、本研究検討開始からワークショップ実施までの成果と問題について考察する。

住民主体の体制による景観まちづくりは、リーダーの存在と構成員の合意形成の機会が必要であり、組合と大学との協働体制の構築には多くの時間を要すると考えられる。本研究検討開始から早い段階で理事長の

内諾が得られたが、理事会開催の頻度により、承認に7ヶ月、担当者決定に10ヶ月を要した。しかし、色彩を通じた景観まちづくりに理解や関心がある理事がいたことで、担当者が決定されてからは、具体的かつ効率的に進められた。

また、住民主体の体制による景観まちづくりは、公式と非公式の会合が存在し、それらが有する機能を使い分けることで人材活用と合意形成が図られることが示された。また、大学の介入により合意形成が促進される可能性が示唆された。非公式の会合では、理事長及び担当者と大学とが詳細な検討をし、若手の担当者から多数の提案がなされた。理事会では、前述の担当者からの提案を踏まえて大学が資料を作成し、理事会に諮り、公式に承認されるといった過程を辿った。一方、研究立ち上げ時は、大学による様々な物的・人的・技術的支援が必要となり、その負担は少なくないことも示された。

さらに、住民主体の体制による景観まちづくりは、当該ワークショップによって一定程度達成でき、人材の育成や一層の発展的取組の契機となったと考えられる。参加小学生及び中学生数は多くなかったが、実施を通じ、組合、小学校、住民等をはじめ、多様な住民が本研究に関与した。また、小学生及び中学生の視点や発言から、ワークショップに対する好意的な反応とともに、今後の景観まちづくりに関する複数のアイデアが得られた。一方、調査方法や広報等、参加対象者の属性や年齢に合わせたワークショップの検討が不十分であり、それらが調査結果や参加者数にも影響したと考えられる。また、当該商店街のアイデンティティを小学生及び中学生が熟知しているとは言えず、継続的な情報共有に問題が残されている可能性が示された。

6. まとめ

本研究は、住民主体の体制による、地域資源に由来する色彩を通じた景観まちづくりを主題とし、本稿では大学人としての立場から、本研究検討開始からワークショップ実施までの成果と問題を明らかにした。成果として、組織におけるリーダーの存在、構成員の合意形成の機会と協働体制の構築のための十分な時間、公式と非公式の会合、合意形成を促進する可能性がある大学の介入、ワークショップを契機とした人材育成や一層の発展的取組の重要性を明らかにした。問題として、研究立ち上げ時における大学による適切な支援のあり方、大学による参加対象者の属性や年齢に合わせたワークショップの検討が示された。加えて、小学生及び中学生を含めた住民への当該商店街のアイデンティティに関する継続的な情報共有のあり方が示された。

謝辞

本研究はYS市庭コミュニティ財団助成金(YS市庭11-S14号)の支援を受けたものです。

脚注

- (1) 景観まちづくりとは景観をより良くすることによって地域の環境を改善していくこうとする試みの総称をいう。本稿では、地域の魅力的な景観を守り、つくり、育てるために、行政や住民等が協働しておこなう取組とし、建築物の建築や工作物の建設などの届出に関わる取組以外の上記の取組を総合的に指すことをとする。
- (2) 景観法に基づきまちづくりの主体を国、地方公共団体、事業者、住民とする。
- (3) 日本建築学会編(2004)。まちづくりの教科書1 まちづくりの方法 丸善出版によると、まちづくりの体制は基本的に市民と行政がつくるものだが、市民ひとりひとりの力には限界があるとし、市民と行政の中間に立つ市民による組織と、この組織を専門的立場から支援する組織や仕組みが必要であるとされている。
- (4) 宇宿商店街振興組合(2020)。PDCA 鹿児島宇宿商店街 2020に基づく。
- (5) 令和5年度 宇宿商店街振興組合第11回理事会議事次第と、宇宿商店街振興組合・鹿児島商工会議所(1993)。宇宿商店街ソフト事業活性化計画策定事業報告書 くつろぎ交差点 USUKI 遊々TOWN - 鹿児島市南部の商業拠点化へ向かって - の名簿、及び理事長へのヒアリング(2024年7月20日)に基づく。
- (6) 大学、理事長、担当理事らによる対面での打合せに基づく(2024年3月28日)。
- (7) ワークショップ実施日時の第一候補は2024年5月12日13:00～16:00としていたが、雨天のため同年5月19日に延期した。
- (8) かわいい、エレガントな、ゴージャスな、ロマンチック、シックな、ダイナミックな、せいけつな、わかわかい、ワイルドな、しづんな、ダンディな、じゅうこうな、カジュアルな、クラシックな、フォーマルな、モダンな、とした。

引用文献

- 1) 観光庁(2016)。明日の日本を支える観光ビジョン
- 2) 国土交通省(2019)。平成30年度政策レビュー結果(評価書)景観及び歴史まちづくり
- 3) 国土交通省(2012)。景観法アドバイザリーブック
- 4) 平田徳恵・岡村祐・川原晋(2016)。景観色彩ガイドラインの活用による地域プランディングの可能性-特定色を指定する「意味付与型」の表現方法に着目して-, 日本建築学会計画系論文集, 78(685), 663-671. <https://doi.org/10.3130/aija.78.663>
- 5) 牧野暁世・木方十根(2021)。地域プランディングのための色彩計画の課題-鹿児島県における実践例の報告-, 日本建築学会技術報告集, 27(66), 991-996. <https://doi.org/10.3130/aijt.27.991>
- 6) 宇宿商店街振興組合・鹿児島商工会議所(1993)。宇宿商店街ソフト事業活性化計画策定事業報告書 くつろぎ交差点 USUKI 遊々TOWN - 鹿児島市南部の商業拠点化へ向かって - 以下、本章はこれに基づく。
- 7) 宇宿商店街振興組合(2019)。みんなの笑顔が作る商店街 宇宿タウンガイド USUKI TOWN GUIDE09
- 8) 南日本新聞(2023)。過去最大級の大型船、ヘリや潜水艦装備の探検型客船など続々海外クルーズ船再開から半年、観光地への2次アクセスなお課題。
https://373news.com/_news/storyid/182133/ (参照2024年7月13日)
- 9) 中小企業庁(2024)。地域にかがやくわがまち商店街表彰。
<https://www.chusho.meti.go.jp/shogyo/shogyo/award/index2024.html> (参照2024年7月20日)
- 10) 杉山朗子(2017)。小学生の景観色彩教育への自治体の取り組み事例 日本色彩学会誌, 41(3).
https://doi.org/10.15048/jcsaj.41.3_60
- 11) 古賀聰章・高明彦・宗方淳・小島隆矢・平手小太郎・安岡正人(1999)。キャッシュ評価法による市民参加型景観調査:都市景観の認知と評価の構造に関する研究 その1 日本建築学会計画系論文集, 64(517), 79-84.
https://doi.org/10.3130/aija.64.79_2
- 12) 小林重順著、日本カラーデザイン研究所編(1997)。カラーリスト・色彩心理ハンドブック - 講談社